

ハンス・アイスラーの室内カンタータ

——音楽によるファシズムの告発——

和田 ちはる

1898年にライプツヒで生まれ、1962年にベルリンで没したハンス・アイスラーは、音楽家であると同時に、それをいかに政治的な主張のために生かすことが出来るかを常に考えた人であった。彼の社会に対する真摯な姿勢は、第2次世界大戦とそれに伴う15年間の亡命という困難の中でも失われることがなく、その作品は成立した時代や社会背景と密接に結びつき、かつ今日でもなお示唆に富むものである。本稿では亡命期作品のうち、1937年に成立した9曲の室内カンタータを取り上げる。これらのカンタータはそれぞれ独立した作品であるが、音楽的、内容的な一貫性を持つことから、通常まとめて扱われる。

テキストは主にI. シローネの小説からとられており、ファシズムに対する明確な抵抗の姿勢をもつ。また音楽はこの創作期に特徴的な「協和的な十二音技法」によってかかれているが、この手法に彼は「民衆」にとっての新しさという意味で将来性を見ていた。さらにここには、1930年以降、階級闘争という実践的な目的のためにB. ブレヒトと共同で制作してきた一連の作品からの手法的な影響を認めることができる。感情移入を避けるためにブレヒトがその演劇論のなかで発展させた、異化効果および「身振りの音楽」という概念は、この作品の美学の中核をなしている。これらの概念がこの作品に、娯楽や現実逃避ではない実際の意義をもたせているのである。

本稿の目的は、あまり知られていないこの作品そのものの再評価と、このような音楽のあり方についての考察を試みることである。テキストの内容を伝え、音楽によってそれに対して注釈を加えていくというアイスラーの姿勢から、この作品がそれ自体ファシズムへの抵抗の表現であると同時に、聴き手に対して現状の正確な認識と自発的な思考を要請するという意味で、まさにファシズムの告発のための作品であることが明らかなる。